

# シャンカラの著作に見られる比喩的表現の一研究

——「海」に関する比喩について——

加 藤 龍 興

## I 問題提起

シャンカラ文献に見られる比喩的表現の一つに「海」を「輪廻」や「無明」等に喩えている箇所が散見され<sup>1)</sup>、これと同様の表現が、シャンカラの真作か否かが問われている YŚV 中でも確認される。それ故、本論に於いてはこの一連の表現方法についての当該箇所を指摘し、その用例についてマイクロフィロロジカルな視座に基づく簡明な要約を為すことにより、YŚV の著者問題に関する一資料を提供するものとした<sup>2)</sup>。

## II YŚV 中の関連部分の呈示<sup>3)</sup>

tasyātmānugrahābhāve 'pi tasyātmārtham avāptavyābhāvāt bhūtānām cāvidyāpaṅkanimagnānām saṃsārasāgarottaraṇopāyaplvopdeśyantarasyābhāvāt tadānugrahaḥ prayojanam (1)

彼〔＝自在天〕にとっての自己への恩寵を無として持っていることがある時にでさえも同じく、〔即ち〕彼〔＝自在天〕には自己の目的にたいして遍達されるべきものとしての無があるが故に、そして、諸生物には、〔即ち〕無明の泥濘に於いて沈み込んでいる者達には、輪廻の海を横断することのための方便としての舟について教示を有しているほかの者にとっての無があるが故に、彼ら〔＝諸生物〕への恩寵が目標としてある (1)。

[YŚV I -25, Cf. MD p.73, II.15-17, TL p.128, RM I p.130]

athāpi kākatāliyanāyena bhūyāṃsi cittāni yugapad utpadyeran tadviṣayaṃ ca vastu tatsa-mānakālam unmajjati, tadetenaiva pr̥sthodarābhāvanidarśanena pratyākhyāyi | nāpi kākatāliyavrttāntēnānādisamayādhīno vyavahārasāgara uttiryate (2) |

【論敵の問】さて同じく鳥と棗との理論によってより一層強大な諸心が同時に生起すべきであろう、且つそれ〔＝心〕にとっての対象である事物はそれ〔＝心〕と同一の時間に浮遊する、というわけであるから、〔貴方が指摘したような〕他ならぬまさにこの背中とお腹との無を例証することによって拒絶を有するのだ。

【YŚV の作者の答】〔今貴方が質問したことにも関わらず、〕同じく〔貴方の示した〕鳥

と棗との〔理論〕の物語によっては、無始の時態に依属する〔世間に於ける〕世俗という海は横断されない〔ことになってしまう〕<sup>(2)</sup>。

[YŚV IV -16, MD p.346, II.11-13, TL p.394, RM II pp.171-172]

### III シャンカラの各著作に於ける当該箇所についての提示<sup>4)</sup>

BrUpŚBh… I -4-9, Cf. MB I p.667, II.23-27. ChUpŚBh… V -10-8, Cf. MB I p.492, II.11-14, VII -1-3, Cf. MB I p.543, II.8-10, VIII -12-1, Cf. MB I p.598, II.16-18. MuUpŚBh… I -2-13, Cf. MB I p.153, II.18-19, II -2-5, Cf. MB I p.161, I.12, II -2-7, Cf. MB I p.162, II.3-4, III -1-2, Cf. MB I p.166, II.8-9. PrUpŚBh… VI -8, Cf. MB I p.132, II.12-14. MāUpKŚBh… III -47, Cf. MB I p.242, II.3-4. BhGŚBh… I -1, Cf. MB II p.1, II.21-23, II -11, Cf. MB II p.12, II.8-10, X II -7, Cf. MB II p.183, II.11-14, X VIII -73, Cf. MB II p.298, II.19-20, X VIII -73, Cf. MB II p.298, II.19-20. UpS… I -17-52, Cf. SeMa p.139, I -17-57, Cf. SeMa p.140, I -17-88, Cf. SeMa p.145, II -1-9~11, Cf. SeMa p.193, II -1-25, Cf. SeMa p.196.

### IV 用法 (使われ方) に関する省察<sup>5)</sup>

①「海」を「輪廻」等に喩えるという形式での比喩的表現は、BhG 等に遡源し得るので<sup>6)</sup>、この表現が YŚV の作者及びシャンカラ特有の文句であるとは当然言えないが、独立作である UpS に於いて頻用されている点を始め他の多くの著作でもこの一連の術語表現を他ならぬシャンカラ本人が奇を衒うことなく用いていた点を考えるに、シャンカラによる表現上の一つの特徴を露呈したものとなっていると言える。そしてこの比喩表現に際しての「海」を表す原語としては、sāgara と mahodadhi との二つが複数の著作に於いて確認され、シャンカラ自身はこれら両語を特に区別せず無差別的に用いていることがその特色の一つとして挙げられる。

② YŚV 中の当該箇所では、「無明の泥濘に於いて沈み込んでいる者達には輪廻の海を横断することのための方便としての舟について教示を有しているほかの者にとつての無があるが故に (avidyāpaṅkanimagnānām saṃsārasāgarottaraṇopāyaplvopdeśyantarasyābhāvāt)」と記述されているが、YŚV 中にある「輪廻の海を横断すること (saṃsārasāgarottaraṇa)」という部分に酷似している表記が、UpS で頻繁に使われていた点で、双方の著作が同一人物に由来するものである可能性を示しているとも解釈が為される。

③ YŚV 中では「輪廻の海 (saṃsārasāgara)」と呼応する形でそれを渡す「舟 (phla-va)」の概念が論じられているが、関連性のある記述が、ChUpŚBh 中での「あたかも底なしで舟を持てはいない海に於いて (sāgara ivāgāghe 'plave)」、PrUpŚBh 中の「無明という大海から明知という舟により (avidyāmahodadher vidyāplavena)」、更には UpS 中での「ブラフマンについての明知という舟により (brahmavidyāplavena)」という言及事項から確認され、原語自体は異なるものの ChUpŚBh 中の他の箇所でも「アートマンについての知識という小舟によって (ātmajñānoḍupena)」という近似した表現が見出される。

④ YŚV 中では「無明の泥濘に於いて沈み込んでいる者達には (avidyāpaṇkanimagnā-nām)」という表現が為されていたが、ここにある「沈み込んでいる (nimagna)」という術語がシャンカラの複数著作でも併記されている。具体的に示すと、ChUpŚBh 中での「インドラにとっての他ならぬアートマンの消滅による恐怖という海に於いて (indrasya ātmavināśabhayaśāgara eva)、ヴァイナーシイカ達が、沈み込んだ (nyamajjan)」や、BhGŚBh 中での「悲嘆と迷乱との大海に於いて沈み込んでいるアルジュナの為に (arjunāya śokamohamahodadhau nimagnāya)」[「大なる悲嘆の海に於いて沈み込んでいるアルジュナにとっての (mahatī śokasāgare nimagnasyārjunasya)」]「輪廻という海に於いて沈み込んでいる者 (saṃsārasāgare nimagnam)」という各箇所、それぞれ確認が為された。

⑤ 「海」や「大海」に喩えられている対象から諸文献を見渡す限り、先ず YŚV 中では直接的には「輪廻の海 (saṃsārasāgara)」という表記を見るが、その文面から「無明」と極めて密接に関与したものとなっていると自ずと読み取れ、シャンカラの諸著でもこれに呼応するかの如くに、「輪廻」がその譬喩の対象になっているのみならず、「無明」や「無知識」にもその対象として扱われている点では一致を示しているものと言える。当該箇所を示すなら、MuUpŚBh 中の「無明という大海からより正理によって到達されたものとして存在しつつある弟子を救い出すことであるそれというものが (yan nyāyaprāptasacchīṣyanistāraṇaṃ avidyāmahodadheh)」、PrUpŚBh 中の「無明という大海から明知という舟により (avidyāmahodadher vidyāplavena)」、MāUpKŚBh 中の「無明の闇なる海に於いて (avidyādhvāntasāgare)」、UpS 中の「無知識の大海を渡る (tīrṇo 'jñānamahodadhim)」等がそれに当たる。ところで、「悲嘆」や「迷乱」を「海」や「大海」に喩える表現もシャンカラの諸著に於いては散見され、この表現もシャンカラが好んで用いた表記法の一つとして指摘されようが、この表現自体は YŚV 中には見出せない。逆に YŚV 中で確認が

為された「日常表現という海 (vyavahārasāgara)」という表現もシャンカラの著作では見出されないで、これらの点は YŚV とシャンカラの諸著作との間での相違点の一つとして数えられようが、各々制約のある註釈文献であることを考慮に入れるなら、必ずしも重大なる差異ではないと思惟される。

⑥ YŚV 中では、「海」を「横断する」という語に相当するものを動詞  $ut-\sqrt{tr}$  から派生した, *uttaraṇa* と *uttīryate* とで表現しているが、シャンカラの諸著作でも同様の表記が実に多くの箇所を確認され、YŚV の作者による表現との一致が確かめられた。

⑦以上の事実は、YŚV の作者がシャンカラ本人である可能性を示す一資料となろう。

---

【略号等】 YŚV: *Yogaśāstravivaraṇa*. BrUpŚBh: *Brhadāranyakopaniṣadśāṅkarabhāṣya*. ChUpŚBh: *Chāndogyaopaniṣadśāṅkarabhāṣya*. MuUpŚBh: *Muṇḍakopaniṣadśāṅkarabhāṣya*. PrUpŚBh: *Praśnopaniṣadśāṅkarabhāṣya*. MāUpKŚBh: *Māṇḍūkyaopaniṣatkārikāśāṅkarabhāṣya*. BhGŚBh: *Bhagavadgītāśāṅkarabhāṣya*. UpS: *Upadeśasāhasrī*. YŚV のテキストはマドラス本 (MD と省略) を用い、諸ウパニシャッドに対する註解のテキストは *Works of Śāṅkarācārya in original sanskrit vol. I Ten Principal upaniṣads with Śāṅkarabhāṣya* Delhi, Motilal Banarasidass, 1992 (MB I と省略) を用いた。同様に、MB II : *Works of Śāṅkarācārya in original sanskrit vol. II ŚrīmadBhagavadvaiṭā with Śāṅkarabhāṣya* Delhi, Motilal Banarasidass, 1988、並びに、SeMa: *Śāṅkara's Upadeśasāhasrī*, edited by Sengaku Mayeda, Tokyo, The Sankibo Press, 1973. 尚、YŚV の英訳に関しては、レゲット氏のもの (TL) と、ルクマニ博士による二巻本 (RM I, II) を用いた。

【註記】 1) このような表現はシャンカラ独自のものとは必ずしも言えないが、独立作である UpS 中で頻繁に為されている表現でもあるので、決して等閑に付してはならないと考えられる。 2) 前項と関わり合うが、YŚV の著者問題を考えるには、このような些細なる術語表現について精細に検討することは必須事項であると言えよう。 3) 下線部 (1) では、世俗者達の有り様を形容するのに、「無明の泥濘に於いて沈み込んでいる者達には輪廻の海を横断することのための方便としての舟について教示を有しているほかの者にとつての無があるが故に」という表現が与えられており、下線部 (2) の方では、論者への答弁の中で、「無始の時態に依属する〔世間に於ける〕世俗という海は横断されない」という表記が為されている。 4) 指数の都合上、シャンカラの諸文献に於ける所載箇所のみの提示に止める。 5) 考察内容を簡潔に纏めることにより結びとしたい。 6) 例えば、BhG XII-7 中では次のような既述が確認される。 *teṣāṃ ahaṃ samudhartā mṛtyusaṃsārasāgarāt | bhavāmi na cirāt pārtha mayy āveśitacetasām ||*

〈キーワード〉 シャンカラ, *Yogaśāstravivaraṇa*

(駒澤大学大学院)

pressed in ablative form.

From these points, we can conclude that Praśastapāda's epistemology parallels the distinction of causes in his causality.

#### 60. Similes used by Śaṅkara: the simile on the ocean

Tatsuoki KATŌ

This article studies a simile of the ocean found in the *Yogaśāstravivaraṇa* with a view to comparative research. I research similar similes discovered in Śaṅkara's works, in order to solve the vexed problem of the authorship of the *Yogaśāstravivaraṇa*.

#### 61. Udayana and Prajñākaragupta: A Sanskrit Fragment of the *Pramāṇavārttikālaṃkāra* Found in the *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi*

Kōji EZAKI

Both in Udayana's *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* (NVTP) and in Ratnakīrti's *Īśvarasādhana-dūṣaṇa* (ĪSD), the following Sanskrit fragment of Prajñākaragupta's *Pramāṇavārttikālaṃkāra* (PVA) is found:

yatkincid ātmābhimataṃ vidhāya niruttaras tatra kṛtaḥ pareṇa /  
vastusvabhāvair iti vācyam itthaṃ tadottaraṃ [ĪSD: tathottaraṃ] syād vijayī sa-  
mastaḥ //

While Prajñākaragupta states this verse and Ratnakīrti quotes it in the context of the refutation of Naiyāyikas' proof of the existence of God (*īśvara*), Udayana refers to it in the context of the refutation of the Buddhist view of unreality. The question arises: What is Udayana's intention in quoting the passage from PVA?

The key to the answer to this question is the word '*svabhāvavāda*', which occurs in the passage of Jñānaśrīmitra's *Vyāptīcarcā* (VC) or Ratnakīrti's *Vyāptinirṇaya* that is cited by Udayana in his NVTP immediately before the citation of the present verse of PVA. The word '*svabhāvavāda*' in the very passage should be taken as signifying 'to speak of the essence of a thing' or